

# 日本テコンドー協会（J T A）試合法 組手ルール改正 2 0 1 4

2 0 1 4 年 1 2 月 1 4 日 通 達  
日本テコンドー協会  
宗師範 河 明生

第25回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会の試合内容に伴い次の通り改正する。

## 一、階級の改正

### 1、男子組手の二階級制一無差別級と軽量級の二階級

- 1) フルコンタクト・テコンドー=日本跆拳道の発展のためには「蹴美のチャンピオン」の誕生が望まれる。
- 2) 4年連続・4大会連続して100kg級の重量選手が優勝した。  
中量、軽量の選手が体重差で敗れていることが明らかとなった。

すでにJ T Aは、当初の「最強路線」を改めており、絶対的強さを求めているわけではないため、無差別級にこだわる合理的理由がない。

また、後樂園ホールリング上で試合を実施しているボクシングやキックボクシングは、僅か3kg未満の差異で細かい階級をわけ試合を実施している。たとえ軽量級のチャンピオンであったとしても、その価値がおちるといった評価を耳にしたことがない。

さらに試合内容等から死亡事故防止等、安全上の配慮をすべき時期になったと考えるに至った。たとえば60kg台の選手と100kg台の選手がノーヘッドギアで後樂園ホールの狭いリング上で戦うことにつき不安を覗きざるを得なかった。

以上の理由により、2015年11月開催の  
第26回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会より男子組手は、  
「無差別級」と「軽量級」の二階級制とする。

具体的体重は、予選会にエントリーした選手の体重を斟酌し決定するものとする。

ただし、無理な減量は固く禁じる。

安全上の配慮によるものであるにもかかわらず素人的な減量にもとづき死亡事故に至るとすれば本末転倒だからである。

### 2、男子組手における体重上限の90kgの引き下げ

上記1の2の理由により、2015年1月より体重の上限を99kgから90kgに引き下げるものとする。

## 二、勝敗基準の改正

### 1、下突き禁止

フルコンタクト・テコンドー＝日本跆拳道の醍醐味は、蹴美である。

すなわち華麗な蹴り技の応酬にその存在意義がある。

その流派的特長なくしてフルコンタクト・テコンドー＝日本跆拳道の発展は望めない。

ところが、相手選手の蹴美の技、たとえば後ろ横蹴りや飛び後ろ横蹴り、後ろ回し蹴り等は  
モーションが大きく、防御に徹して後進かわし防御等でスタミナを温存し、  
蹴った後の相手の選手の腹部や胸等に下突きを連打する手法は、蹴美ではない。

これは極真系の空手選手の中、体重が重くローキックや下突きのみが得意とするものである。  
路線がまったく異なる他の打撃系武道の技を持ち込むことは断じて許されない。

よって2014年12月の予選会より、この手法は禁止する。

### 2、ヘッドギア着用種目の「みなし一本勝ち」および「みなし技あり」の導入

本年度、女子組手決勝戦で、A選手の威力ある後ろ回し蹴りがB選手の顔面にクリーンヒットした。  
本部席からは鮮明に見えたが、死角であったためか主審も副審も反応しなかった。  
仮に、ヘッドギアを着用していなければ明らかにA選手の一本勝ちであった。

しかし、女子選手、壮年選手等の組手試合でヘッドギアをなくすことは、安全上できない。  
他方、ヘッドギアがなければ、B選手は負けていることも事実である。

そこでヘッドギアの顔面正面をガードしてる面の部分に、蹴美の蹴りが決まった場合、

「ヘッドギアがなければ一本負け」という意味で「みなし一本勝ち」

「ヘッドギアがなければ技有りダメージ」という意味で「みなし技あり」を新たに導入するものとする。

主審や副審が判定するが、仮に見のがしても最高審判長の権限で宣言できるものとする。

2014年12月の予選会より実施する。